

巻頭言

「建設の機械化」から顔の見える
機関誌を目指して

佐野正道

本年4月から社団法人日本建設機械化協会（以下JCMAという）の広報部会機関誌編集委員会の委員長を拝命いたしました佐野でございます。微力ながら精一杯努めて参る所存でございますので、宜しくお願ひ申し上げます。

委員長就任以降、まず着手しましたのは、沈滞モードの漂う編集委員会の活性化です。編集委員会に出席して驚いたのは、編集委員からの発言がほとんどなく、見識ある一部の編集顧問の方々から、掲載論文のタイトルが好ましくないとか、「てにをは」の修正等の些細な意見が散発的に出されるだけで、編集委員相互間で議論を戦わせる雰囲気はありませんでした。各号の編集担当幹事が資料を棒読みするだけで済ませることもありました。そこには、JCMAの機関誌として、JCMAの有する様々の最新情報を世間へ発信し、JCMAの活動やアイデアを社会貢献に役立てようという意図は全く感じられませんでした。各担当編集幹事が、個人的に知りうるあるいは依頼できる方々に、限定的且つ機械的に専門的な技術論文の執筆を依頼しており、そこには、JCMAの顔としての明解な掲載意図は殆ど読みとることが困難でした。技術論文を本誌に掲載してスペースを埋めることが恒常化しており、従って、執筆者は真剣に執筆しているものの、読者の大部分はJCMAらしさの感じられる記事を見出すことができず、掲載の技術論文には興味を示しえなかったものと史料されます。JCMAとして何を主張訴えたいのかを分かりやすく、具体的に示すのが機関誌として期待される役割ではなかったでしょうか。

この閉塞状況を打ち破るには、各々の職域から選ばれた編集委員が全員汗をかき、率直に議論を戦わせて毎号の機関誌を作っていくプロセスの再構築が緊要と考えました。そのためには、担当幹事の編集幹事会を廃し、顧問には、自発的に委員会へのご出席をご遠慮していただいて、編集委員会の場で委員全員が誰にも遠慮なく自由闊達に意見を述べられる雰囲気づくりから始めることにしました。

次に、編集方針を大幅に改め、編集は、担当幹事のみならず編集委員全員の責務となるように工夫しました。具体的には、従来の専門的かつ難解な技術論文の掲載に偏っていたのを改め、毎号を全て特集号化して、時宜を得た特集テーマを取り上げ、それに関連する行政情報、技術情報等の紹介、JCMAの各部会やJCMAの施工技術総合研究所で行われているアップデートな活動報告を新たに加えて、堅苦しさを一掃し、寝ころがっても読めるような紹介記事を増やすこととしました。従来は、テーマを絞らずに専ら技術研究論文を中核に据えて、担当編集委員の声の掛けやすい範

囲で選定依頼する編集方針でしたが、今後は、世間に対してコンセプトを明確にして主張できる機関誌へと転換を図り、そのためには、編集委員全員がそれぞれの持ち場でフル稼働できる体制を整えることとしました。

3つ目には、機関誌の体裁を改めることにしました。表紙を飾っていた建機メーカーの広告写真を廃し、特集号にふさわしい写真を編集委員や執筆者の協力を得て入手し、できる限り大判で掲載することにしました。更に、グラビアも表紙の直近の頁へ移動して見やすくし、かつ特集号のエキスをビジュアルに示すものとなりました。今後は更に表紙のレイアウトの見直しや毎年度で表紙の色を変えることも検討しています。また、編集誌名については、長年慣れ親しんできた「建設の機械化」から、「施工」というキーワードを含んだ、例えば「施工企画」等へ変更し、機関誌の中味の大転換が一目瞭然となるよう想を練っているところであります。もっとも、これには守旧派からの根強い抵抗も予想され、慎重に事を運ぶ必要があります。

「建設の機械化」は、施工の合理化を推進し、建設事業の効率化に貢献してきましたが、今や、機械化は当然のこと、施工に関する新技術の活用等に着目しつつ、コスト構造改革の積極的な推進に資する観点から施工の一層の合理化を推し進める必要があります。平成13年1月の国土交通省発足と同時に、旧建設省建設機械課は、建設施工企画課へと名称変更して施工技術行政に軸足を置いた体制を整え、また、JCMAの研究も、昨年10月に建設機械化研究所から施工技術総合研究所へと名称変更し、時代の要請に適切に応える技術研究開発の体制を整えたところであります。このことを鑑みても、いつまでも「建設の機械化」に頑なに固執している時代ではないと思います。更なる飛躍、衣替えが望まれると思料されます。

機関誌の改革は、まだ緒についたばかりですが、スローガンばかりの構造改革にならないよう、できることから地道にかつ率先して行き、実効ある形を作っていきたいと思っています。そのためには、本機関誌を愛読されているJCMA会員の皆様他、多分野にわたる読者の皆様の新たな編集方針等に対する忌憚のない意見を十分に拝聴し、斟酌することが肝要かと存じます。皆さまの声を踏まえ、JCMAの顔のみえる機関誌としてその時々最新の情報をお届けできますよう、編集委員一同、一層の研鑽に努めて参ります。宜しくご指導、ご鞭撻の程お願ひ申し上げ、おそくなりましたが、就任のご挨拶と致します。